

します。我が軍の兵力が少ないので、八路軍はラッパを吹いて包囲してきました。小隊、分隊等少数の隊は全滅するものもあり、北支の戦いも、河南作戦以後は敵の兵力も多くなり、我が軍の損害が多くなったように思います。

中隊の汜水駐留はわずか五カ月で終戦を迎えることとなりましたが、終戦直前の八月十日前（ソ連参戦頃）、ポツダム宣言による我が国の無条件降伏の情報（頃）が、ソ連や重慶政府から中国全土に流布されるまで、我が軍に協力的だった汪政府系機関も浮き足立ち、保安隊も敵側に寝返るようになりました。

日本軍の無条件降伏を知った八路軍は、我が軍の兵器を蒋介石軍に渡さぬよう攻撃を開始し、国・共紛争が表面に出て、北支の蒋介石国府軍は、戦後日本軍を中共軍討伐に使用もしています。

八月十七日には、まだ進入したことのない、我が軍の栄陽県の城壁を突破し、我が警備隊の至近まで攻め入り、周辺の民家屋上から包囲、銃撃を加えました

が、我が軍の反撃により、幾人かの遺体を残し敗走しました。

その戦闘で、我が竹腰中隊長は警備隊望楼上で戦闘指揮中、左肩から背中に貫通銃創を受けました。その後、中隊長は鄭州・済南の陸軍病院に後送されました。そのため、岡田中尉が中隊の指揮をしました。

分遣隊の撤収、新郷の集中営への集結、同地で数カ月間にわたる抑留期間を経て、昭和二十一年四月六日、上海から乗船、同九日佐世保に上陸、復員して、私も故郷へ帰ることが出来、今日に至っております。

北支で兄と会う

埼玉県 斉藤 広一

私の生家は農家で、茶と麦を作っていました。家族は両親と五男三女の十人で、長兄は家業、次兄は海軍中尉、三男は召集で満州に、四男は衛生兵で中国に出征、私は五男です。それから住み込みの農業手伝いの

人（サクマイと呼んでいた）がいました。

私は東京に出てガソリンスタンドに勤めて部品販売や車の修理等を兵隊検査までやっていました。

昭和十五（一九四〇）年の六月頃、徴兵検査で第一乙種合格現役入隊となり、その年の十二月一日に入隊ですから十五年兵となります。

東部三部隊近衛騎兵隊に入隊、十日後には神戸から輸送船に乗せられ北支の塘沽の沖合に碇泊、曳舟で天津に上陸、夜行列車で津浦線を南下、済南の北にある安陵で下車、自動車で一時間半で山東半島のつけ根の街、寧津に駐屯する第二十七師団（極）搜索隊の第一中隊に入隊しました。途中の輸送船は南に北に航路を変えて蛇行しながらの輸送だったのが当時としては不思議でした。

入隊した搜索隊は従来騎兵隊が編成替えの途中という状態で、第一中隊が馬、第二中隊が戦車、トラック隊で、馬隊は解散の予定で歩兵隊に十頭ずつ分配されていきました。

間もなく私は同じ場所にいる歩兵第二連隊に転属と

なり尖兵要員になりました。

新兵教育は馬に乗って集団襲撃するのが主で、抜刀して敵を突く訓練が主でした。

馬の取り扱いは古兵から「お前ら兵隊は一銭五厘だが馬は生きた兵器だ」とやかましく言われながら仕込まれました。特に水飼いが大切で朝昼晩と毎日馬が飲んだ水の量を記録して報告せねばなりません。それから消化状態を調べるため、湯気の出る馬糞を絞って水分を抜き、広げて麦が何粒残っているかを調べねばなりません。

隊の馬は十二歳から十五歳で人間の四倍が馬齡ですから相当老馬でした。しかし人間を見るのは達者で、私ら新兵を馬鹿にして言うことを聞きませんが、古兵下士官を見ると途端におとなしく、言うことを聞くので腹が立ち、上官のいないことを確かめて馬小屋掃除用のほうきで思い切りブン殴ってやりました。

寧津城の周辺は共産八路軍の勢力下で夜になると外出禁止です。知らぬ間に壕が掘られて新兵の訓練も城

内が多かったです。城内が東西南北になり城壁の上は自警団が巡回警護していました。

日本軍の衛兵は夜間城内の巡視に当たっていました。近くの部落の偵察を二騎でやりましたが、まず一周し、二周目の途中で急に馬首を反して突進すると在敵の時は必ず撃ってくるので判断できませんでした。いない時は撃ってきません。

八路軍の命令で、村長が住民を夜間動員して深い塹壕を掘らせるので、いたる所に壕が掘られているので無気味でした。

ある時、襲撃された跡を見に行くと、敵が七人固まって死んでいるのを見ましたが、全部が耳の上をやられているので不思議に思い古年兵に尋ねたら、壕の深さは人間の丈より深いので普通なのだが所々に浅い所がある。日本軍の重機関銃がその浅い所に照準を合わせて狙っていると、敵兵がそこを通過するとちょうど頭が見えるので、そこでダンと点射すると耳の上に当たり、貫通即死となるのだそうです。

八路軍は日本の重機が優秀なのを知ってこれを避

け、軽機や小銃の方に向かってくる傾向が強いので、他隊と無電で連絡を取り、重機の方に追い詰めるのがこの地方の作戦だったようです。

搜索連隊の人員は歩兵連隊とは違って少人数で一中隊一〇〇人くらいです。城内には第一、第二中隊が同居でした。八路軍が日本の戦車を攻撃する方法は丸太棒をキャタピラーに突っ込んで止まらせ、天蓋を開けた際に手榴弾を中に投げてやっつける戦法を取ったそうです。

城外を華北交通のバスが一日一回走っていました。が、日本兵が乗ると同乗の現地人が「日本兵を見つけると八路軍が撃ってくるから姿を見せないでくれ」と注意するのだそうです。

そして「このあたりは大丈夫だから頭を上げてもよろしい」と言っていたそうですから、八路軍がいる場所を承知していました。

城内には若者はいなくて老人と子供が多く、私は部隊の残飯を取りにくる子供をつかまえて洗濯をしてもらいました。

城外で乗馬訓練中に初年兵が撃たれたことがありましたが、馬が衛兵所に帰って来てすぐ手当てができて助かりました。馬の利口さが分かりました。

身体の調子が悪く、栄養失調で三カ月天津の陸軍病院に入院したところ、私はすぐ上の兄（四男）の角造が衛生軍曹で勤務していることを看護婦から知らされびっくりしました。

早速見舞いに来てくれるかと待っていましたが、なかなか来てくれませんでした。翌日から看護婦の応対が変わり親切になり、果物や菓子も持って来てくれるようになりました。

公私の別をきびしくしたのだと思いますが、看護婦に私の面倒を良く頼んでくれたのだと思います。いずれにしても異境の地で兄弟が会えるなんて何と幸せだと思つづく思いました。

そのため食事も間食を入れて毎日五回と厚遇され、回復も早く二カ月で退院でき、兄にもお礼を言って別れました。

入院中に兄が天津市街を案内すると言って私に公用

証をつけてくれ、街をあちこち見物させてくれた日が、奇しくも昭和十六年十二月八日の戦争が始まった日だったのです。今でも忘れられない想い出の強烈な日でした。

断片的な想い出ですが、見習士官に対して古参軍医が「シラナイ士官殿に敬礼！」と号令を掛けて、いやがらせをしていたのを覚えてます。昭和十八年二月、論功行賞で金三百円もらえるはずの所が、何の理由か駄目になりました。軍隊でもらったのはビンタだけです。

それから戦死者の火葬ですが、なぜか眞野（私の旧姓）は火葬が上手との評判が立って、何回かこの当番になりました。

良く焼くには十二時間かかります。特に内臓が半分焼けたと後の始末が大変です。深い穴を掘って、まず薬を十分敷き詰め、薪を置いて石油をタップリかけ、棺（現地職人製）を置いて上に薪を乗せ点火し、十二時間その回りを、逆さにした小銃を肩にかけて一晩中巡視するのです。

遺骨宰領者となって内地に帰還することが古年兵の楽しみの一つだったので、私は焼く方専門で宰領したことはありません。

昭和十八年、山西作戦が始まり、六カ月間討伐に出勤しました。私は本部詰めでしたが、山西の地形は厳しく閻錫山の中国軍と八路軍の両方が相手ですから大変な苦勞でした。特に八路軍の待ち伏せ作戦にかかり、小さな部隊の全滅が相次ぎました。

間もなく、昭和十四年兵が除隊するのを見て、次はいよいよ俺たちの番だなあと胸をふくらませたのを覚えています。

昭和十九年四月、兵役延期中のところ、軍令〇〇号により満期除隊となり、千葉県佐倉の東部六十四部隊に帰り、ただちに除隊となりました。

その時の階級は陸軍上等兵でした。家に帰りますと父母は健在でしたが、海軍へ行った次兄は昭和十九年六月十九日のマリアナ海戦で空母「翔鶴」に乗っていて沈没、戦死しました。他の兄は無事帰りました。

除隊してから酒屋の娘と結婚して養子となり、現姓

の斉藤と改姓。薪炭、プロパンの販売も手がけ、娘一人ですが婿を取り跡継ぎにしました。

戦友会をやるので入隊時の名称を頼りに通知を出しても戦死した者が三分の一もあり、現在生きている者は二十二人と減少し、出席できる者はわずか八人となり寂しい限りです。

機関銃隊員として戦務

栃木県 小林 正雄

私は栃木県安沢郡の農家の長男に生まれ、父母のもとに兄弟妹九人とともに育ちました。学校卒業後家事に従事し、青年学校を終了し、昭和十八（一九四三）年徴兵検査で無事甲種合格でした。

昭和十八年十二月二十日、現役兵として独歩第二十大隊歩兵第一一五連隊（高崎市）第七中隊に入営しました。翌年一月七日、屯営を出発、博多港より出港、釜山、鮮満国境、山海関を通過し、原隊の駐屯地であ